

プロローグ

オーストラリアでは、春になると、桜に似た薄紫色のジャカラランダの花が咲きます。満開の時期になると、それはまるで、日本の桜のような美しい光景です。そんなジャカラランダの美しい二〇〇三年の春、日本から、両親、兄、そして叔父、叔母と一緒に渡豪し、私はオーストラリア人の夫と結婚式を挙げました。毎年ジャカラランダの花が咲く頃、私は結婚式を思い出します。

私はオーストラリア人の夫と結婚するにあたって、今は亡き祖母をはじめ、父側の親戚に反対されて、それを押し切るかたちで結婚しました。反対された理由は、素性の知れない外国人と結婚して、遠い外国に住むこと、それに伴う大きな困難や、年老いていく両親を残して外国へ嫁ぐことへの懸念など、まだ若かった私には伺い知れない祖母や親戚のさまざまな葛藤があつたのだと思います。ところが、その誰よりも寂しいはずの両親は、私たちの結婚を快諾してくれたのです。そして口にくそ出さなかつたけれど、同じく複雑な思いだったであろう母方の叔父夫妻も、オーストラリアでの結婚式のために渡豪し、私たちの結婚を祝福してくれました。

結婚式で一番私の心を打つたのは、叔父が瀧廉太郎の「花」の曲を、兄のアコースティックギターに

合わせて、二人で歌ってくれたことです。日本語のやわらかな「花」の歌詞と、ギターの優しい旋律が、その場に美しく調和し、みなその異国のメロディーに耳を傾けました。後から、この歌は叔父の提案だったと聞きましたが、二人の粋な演出は、今でも私の心の中に咲く「花」です。

国際結婚、異文化のパートナーシップというのは、本人たちだけが幸せなら、それで良いのではなく、家族や身内、友達、近所、地域の人たちの理解が不可欠です。たとえば、私の亡き祖母は大正生まれでしたが、私に結婚相手として「黒んぼはやめておけ」と言いました。

悪気はなくても、最初から人種の偏見を持っている人がいれば、相互理解は難しくなります。偏見というのは、もともと無知から来るものです。固定観念、個人的な思い込み、間違った知識、過去の経験などから外国人はこういうものとか、人種、職業、外見などで人を判断してしまうことも多いかもしれません。でもこれからの時代では、それはうまくいかないでしょう。今後は、日本人、外国人という枠がどんどん薄れ、日本をすごく理解している外国人や、世界中で活躍する、広い視野と柔軟な考えを持つ日本人、そして高いコミュニケーション能力を持つ国際人が増えていくと思われるからです。

今はインターネットで世界中の知りたい情報が手に入る時代です。語学も独学でどんどん身に付けられるし、オンラインで世界中の人と会話もできます。そして新しい生活、知識、経験を通して、今よりもっと異文化のパートナーを持つ人が増えるでしょう。そこで、日本人は従来のように、古い価値観

や保守的な考えのまま、「郷に入れば郷に従え」と、日本に来る外国人と接してうまくいくでしょうか？これまで異文化パートナーシップというのは、限られた人にとつての問題でしたが、今はあらゆる場面で、多くの人が異文化の人たちと触れ合う機会が増えています。文化が違っていると、幸せのかたちもさまざまです。

一昔前だと幸せな人生には、結婚が不可欠で、成人したらみんな結婚し、子供を作つて立派に育て、夫は定年まで働き妻は夫を支えて一生寄り添つて生きる、というような型が一般的で、みなそれを理想のように思つてきました。でも時代とともに、幸せのかたちも多様化します。

結婚だけ見ても、十代で結婚する人もいれば、四十代、五十代で結婚する人も珍しくありません。六十代で離婚し、再婚して幸せになる人、離婚して一人で幸せになる人、本当の個人の幸せなど、他人には決して知りえないでしょう。幸せは人それぞれ、ということを多くの人が理解し、受け入れれば、結婚をしない人、子供を持たない人、離婚した人、型にはまらず自由に生きたい人が、肩身の狭い思いをせず、もつと自分らしい人生を生きられると思います。

日本人は、外国から見ると、素晴らしい精神性や、和の心など良いものをたくさん持っています。と同時に、古いきたりや、必要のないしがらみにとらわれ、外見や表面的なもので人を判断し、一般的

な幸せの型にはまらない人にとっては、非常に生きにくい社会です。

異文化を理解することは、相手の文化を受け入れ、お互いを尊重し合うことが不可欠です。私の住むオーストラリアでは多くの学校で日本語の授業があり、日本に興味を持つ人や、日本に行ったことのある人がとても多いです。そしてこのように、多くの外国人が日本に行く流れは増え続けるでしょう。

誰もが、私の家族のように、身近な人が外国人と結婚する可能性が大いにあり、いつ外国人の親戚ができるかもわかりません。この本は国際結婚をしている人、これからするかもしれない人だけにではなく、外国人にまつたく縁のないと思われる人にも、異文化に対する理解と、人種や国籍を超えた幸せなパートナーシップを築くヒントになれば、うれしい限りです。